

小学校高学年の部・胡堂賞

願いを込めた千羽鶴

古館小学校 五年 中村 桜椰花

図書館で一冊の本が目に入った。一人の女の子が、両手で大切そうに鶴を持っていく表紙の本だ。私は、その本を手にとって、ページをめくってみた。「あつ、この話！」私が一年生の時の学習発表会で、六年生がやった劇だと気づいた。一年生の頃の私は、劇の内容をあまり理解することができなかった。でも、六年生の迫力ある演技に圧倒されたことを今でも覚えていいる。一年生の時は、理解できなかった内容でも、五年生になった今、この本を読めば、きっと理解できるだろうと思い、この本を読むことにした。

この本は、一九四五年に広島に投下された原爆によって被爆し、「原爆の像」のモデルになった佐々木禎子さんの物語で、禎子さんのお兄さんが

書いた物語だ。禎子さんは、小学校六年生の時に、放射能の影響で白血病を患い、一年も経たずに命を落としてしまった。

禎子さんは、白血病という病におかされながらも、どんなに辛くても、家族の前では明るく振るまって、心配をかけないようにしていた。自分のために働き、疲れている父親のために、禎子さんは、入院している病院を抜け出し、薬を買って来てあげる場面が、とても印象的だった。人のことを思いやるやさしさにあふれている人だと思っった。

「千羽鶴」という言葉が、題名に書いてあったので、私は、千羽鶴に何を願うのか気になっていた。読み進めていくと、次のことが分かった。禎子さんは、千羽鶴を折ることで病気が回復することを願ったが、果たすことができなかったこと。次の千羽は、禎子さんの父親が肩代わりした借金  
が、早くなるようにと家族のために願いを込めて折っていたことを知った。

この本の筆者である、兄の雅弘さんは、妹の死を素直に受け止めることはできなかったと思う。でも、禎子さんの遺体を解剖させてほしいという依頼があった時、他の人たちのためになるなら、と了承した。禎子さんの家族の行動は、とても勇気のある行動だと思っったし、家族みんなが、人を思いやる気持ちで満ちあふれていることが伝わってきた。

この本を読んで、当たり前の日常のありがたさを、改めて実感した。思いやりの心が、人の心を温かくし、安らぎをたくさん感じることができた。

今の世の中は、自分の命、人の命を粗末にしているように感じる。簡単に命を捨ててしまっってはいけない。禎子さんのように、生きてくても生きることができない人もあるのだ。私は、平和なこの時代に生まれてきて、戦争がどれほど恐ろしく辛いもの

か分からない。でも、死んでしまったら二度と生きて返れないことは分かっている。だから、私は、これから先、命を絶対に粗末にしないことを誓う。今、自分にできることを精一杯やり、周りの人に笑顔や幸せを与えられる人間になりたい。

図書名 禎子の千羽鶴  
著者名 佐々木 雅弘